島根大学教育学部紀要（人文社会科学）第17巻　1～7頁　昭和58年

羞恥論への予備的考察

堤　雅　雄*

Masao TSUTSUMI

A Preliminary Study of the Sense of "Shūchi" (Shame).

I. 序

1. 羞恥と青年期

羞恥は思春期以降の青年期を，他の時期から截然と際立たせる心的現象である。

ついこの前まで，教室でけたたましく手を挙げ，教師からの指名を求めていた生徒たちが，急に口をつぐむようになる。きのうまでは何の拘りもなく異性の友と遊んでいた子供たちが，突如として互いに身を避けるようになる。小学校高学年の頃に現れるこの急激な変化の背後にあるものこそ，鮮烈な羞恥感ではなかろうか。

勿論，2，3才の幼児にも，はにかみや照れの表情を見出すことはできる。Buss, A. H. (1980) [1] は，親へのアンケート調査によって，3才児の5分の1，5才児の約半数に embarrassment（当惑，きまり悪さ）の表出が見てとれることを示し，このことと Perspective taking 研究からの知見とをあわせ考え，5才の頃に社会的（客体的）自己の意識が芽生えるとみなした。

しかし，この時期の embarrassment と，思春期以降の羞恥とは，かなり趣きを異にする。両者の決定的な違いは，自らの情動を意識化するか否かにある。思春期以降は羞恥する自分を意識することにより，羞恥しているふがいなき自分と，それをみつめ対象化している自分との間に空隙を感じることとなる。他者存在を媒介として，自己の内部に亀裂が生じること，これが思春期以降の羞恥を真の羞恥たらしめる所以と考えられる。

ちなみに，羞恥の病態たる対人恐怖症については，その発症時期が思春期以降の青年期に集中し，多くが成人期に達すると次第に寛解することが一般に認められている（例えば山下，1977[2] を見よ）。

あのいたたまれない程に鮮烈な羞恥経験もまた，「おとな」になるにつれ急激に失なわれていく。かつて無限にあった自己の可能性が次第に限局せられ，そこに生きる生を甘受するようになった「おとな」たちには，もはや自己内部の空隙や揺ぎの生じる余地さえなくなってしまうということであろうか。おとなになることが「恥知らず」になることであるとするなら，それは悲しいことである。

2. 「自分が自分であること」の揺らぎ：存在論的不安定

「自分が自分である」ことは，一見極めて自明のことのように思われる。しかし，この自明性を支える基盤は意外に不明で，かつ脆弱である。

「私とは何か」という問いは青年期の永遠のテーマであるが，この問いをつきつめた所には，常に他者の影が現れてくる。自己の自己性が徹頭徹尾，他者性につきまとわれること，また，自我と他我が相互に相手の存在を支え合う契機となるという逆説は，多くの論者が指摘するところである。とすれば逆に，他者存在が「自分が自分であること」を揺るがす契機となることもまた当然であろう。

あるがままに生きられた平和な児童期が，自己の中核たる身体（これが自一他を媒介するものであるが）が反乱を起こす第二次性徴期の到来によって唐突に終りを告げ，自己に対する覚醒がひとたび生じると，自己の自明性は崩壊を始め，これまでの自分の中にいくつもの間隙が生じてくる。自己の対象化，自意識はそれ自体，自己に不幸をもたらすことになるが，その一方，「自分が自分であること」の実感は，これまでの「与えられた自己」の崩壊，即ち「自分が自分でないこと」を通してでなければ得ることができないのも事実である。

Laing, R. D. は，「ひき裂かれた自己」(1960) [3] の

* 島根大学教育学部教育心理学研究室

中で次のように述べている。

「自己の意識性の一対象として，また他者の意識性の一対象として，自己存在についての意識性がたかまったり強まったりすることは，実際上青年期によくみられる現象であり，周知のように，はにかみ，赤面および漠然とした当惑感といったものと関連がふかい。このようなぎこちなさを説明するのに<罪責感>が持ち出されることがよくある。……

「しかし，こんなふうな見方で自意識を理解することは，その人の基本的存在論的境地が存在論的不安定のそれであるような人間が当面させられている中心問題を回避することになる。……

「存在論的に不安定な人間における自意識は二重の役割を果している。

1.自分自身を意識し，他人がこちらを意識していることを知ることは，自分が存在していること，また，彼らが存在していることを確認する手段である。……

2.……自意識とは，他者にとって目に見える存在であるという単純な事実によって潜在的に危険にさらされているところの自分自身についての鋭敏な意識性である。このような危険に対する明白な防御手段は，なんらかの方法で自分を見えなくすることである。」（以上，訳書p.142～p.146）

かくしてLaing は，「他者から認められ」ることも，「他者との弁証法的関連のなかで生きること」もなく，「ただでさえ不安定なアイデンティティないしは生動性」さえ失っていく分裂病質者の実存的状況に論を進めていくのである。いささか引用が長くなったが，上記の彼の記述は「羞恥」論として読み替えてみることも可能であり，そうすればそこに重要な示唆を見出すことができる。

青年期とはそれ自体（相対的意味で）存在論的に不安定な「分裂病質」的時期であり，そこでの，他者のまなざしの中に自己が無化し，石化していく感覚が羞恥であるとすれば，青年がこの羞恥感に極めて親和的であるのも当然である。

3.「二重性」を生きること：日本人の心的特性としての羞恥

かつて和辻（1935）[4]は，風土の二重性に根ざした日本的心性の二重性を，「しめやかな激情」と「戦闘的な恬淡さ」という表現の中に表わした。このような二重性は男女の「間」や親子の「間」，あるいは「家族」という「間柄」（共同態）の作り方にみられる質と相即的であると同時に，「うち」と「そと」，「個別性」と「全体性」といった存在の様態においてみられる二重性にも通底するところである。

このような二重性を，Benedict, R (1946) [5]は日本文化の基本的パターンとみなし，これを「菊と刀」という書名に象徴した。さらに彼女は，西欧人には不可解な日本人の性格的二重性の源泉を，幼児期の自己主張から青年期の自己抑制への，日本的訓育の不連続性に求めている。にもかかわらず，彼女は，日本人の特性たる「恥」の意識については，内的規制原理である西欧的「罪」の意識の対極にある外的規制原理としてしか捉えきれなかった。日本の土を踏むことのなかった彼女には，日本的二重性は最後まで不可解に終ってしまったようである。

このようなBenedict の「恥の文化」論の，内と外の一次元的捉え方では，自と他の「間」で生起する，内在化された他者と外在化された自己とが交錯する感情としての「恥」（や羞恥）を捉えることはできないであろう。

作田（1972）[6]は Benedict の「恥の文化」論があまりに一面的な捉え方であると批判するとともに，恥と罪を媒介する「羞恥」こそが日本文化の本質であると提起している。彼のいう羞恥とは，普遍主義的価値志向と個別主義価値志向のずれによって，或いは準拠集団からの視点と所属集団からの視点の交錯によって生じる，自己の同一性が見失なわれる危険性に対する反応である。

この作田の論を踏まえて内沼（1983）[7]は，人と人との「間」を構成する自我と他我の2つの契機のうち，前者に傾斜する我執性を作田のいう「私恥」に，後者に傾斜する没我性を「公恥」に対置させ，「羞恥」をこの没我と我執のあいだを漂う「間」の意識だとした。彼にとって羞恥とは，人間の「間」性の表われそのものである。

ところで，羞恥という極めて人間臭い感情は，心理学の領域ではどのように扱われてきているのであろうか。

試みに手近にある Psychological Abstract 誌[8]の索引を引いてみると，“Shame” については “Guilt” を，“Shyness” については “Timidity” を見よとなっている。羞恥は欧米の心理学界では，キリスト教的倫理である罪の意識や，社会的未熟さに包摂されたものとして扱われ，未だ1つの独立した心理学的主題にさえなっていないのである。

この種のテーマを扱ったもののうち，Buss, A. H. (1980) [1]は，embarrasment（当惑），shame（恥），audience anxiety（あがり），shyness（内気さ）の4つを社会的（対人的）不安として統合し，これを自己意識理論でもって体系化しようと試みている。

彼によれば，これら4つに共通するところは，他者の

現前によって喚起される公的自己（見られる自己）の覚醒（Public self awareness）と，それに伴う苦痛感である。そしてこれらの対人不安によって顕現化する自己は，本質的に公的（対他的）であるという点で，私的（private）である罪責感と対照的であるとされている。

なお彼は恥について私恥（personal shame）と公恥（public shame）の区別を一応おいてはいるが，前者が少数であるが故に，恥総体を基本的に公的なものとみしている。

ここにみられる彼の視点の特徴は，羞恥に関連する諸感情を，1)対人関係を阻害するものとして，否定的に評価していること，2)私的一公的（内一外）ないしは自一他の二分法によって切開し，両者の相互性や弁証法的関係をみる観点に欠けていること，の2点であり，内沼などのそれとはその意味で対照的である。なおこのような傾向は Zimbardo, P. G. (1977)[9] などにも共通しており，未だ Benedict を超えているとは言い難い。

4，日本語の感情表現を通してみられる心性

日本語における対人感情表現には，主体一客体図式を超えた経験の共有性（共感性）と両義性がみてとれる。

例えば「かはゆし（かわいい）」は，「顔ハユシ」のつまった形であるという。顔がほてるとは相手を見るに耐えないということであり，これが後にかわいそうだという気持や相手への恋慕の表現になっていく。同様な意味の変遷は「いとほし（いとしい）」にもみられる。相手を「いとふ」気持，即ち見るに耐えぬが故に，相手に対しても自分に対しても身を閉じたい気持を表わしていたのが，いたいたしいと思う気持ち，更には恋慕の表現となっていく。

「かなし（哀しい，愛しい）」もまた元来は，恋人や子供にあれもしてやりたい，これもしてやりたいと思いながら何もしてやれない自分の無力さの表現であったという。そして「やさし(優しい)」は，身の「痩せる」思いの意から「恥ずかしい」という意に，更には「慎しみ深く殊勝である」や「扱いやすい」という意味に転化していく（以上は大野，1966[10]による）。

これらの言葉（特に前三者）に共通してみられるのは，無力で弱い状態にある女性や子供に対する感情移入から生まれた自己のいたたまれなさの表現が，相手への愛情の表現や，相手そのものを修飾する語へと転化していく過程である。

古語の「恥づかし」そのものも，こちらが恥ずかしくなる，気が引けるの意から，相手の様の美しさ，立派さを表わした語であったという。「恥づかしき人」とは本来はその人が恥ずかしいのでなく，他の人を恥ずかしがらせる人のことである。

現代語の「はずかしい」もまた，これらの古語と同様に，自己と他者の間を，主体と客体の間を揺れ動き交感しあう中で，避けよう，隠れようとしながらも求め，愛するという，複雑で微妙な日本人に特徴的な心性を表わしていると解するのは決して不当ではない。

例えば，浴室や更衣室などのドアを何気なく開けて，たまたま異性の裸体を見てしまった状況を思い浮かべてみよう。この時生起する感情ははずかしさ以外の何ものでもない。ところでこの場合，はずかしさは見られた側にのみ属する感情であろうか。決してそうではない。見てしまった側にも同じ位の羞恥が生じるはずである。そこにはお互いの視線の交錯による相互主体的な場の形成と経験の共有がはっきりと認められる。

II．羞恥の内包するもの
——伊藤の調査結果をとおして

ここで「羞恥」について心理学的にアプローチした伊藤（1979）[11]の調査結果を取り上げてみる。これは筆者の指導に基く卒業研究であるが，そのデータを再分折することによって，日本人青年が抱く「羞恥」の内包に迫ってみよう。

彼女はまず予備調査で，「『はずかしい』という感情はどういう時に生じると思いますか。思いつくままにできるだけたくさん書いて下さい。」という質問を，高校生（男子24名，女子20名，計44名）と大学生（男子11名，女子25名，計36名）に課した。その結果を整理し，本調査用の質問項目を構成した（表1参照）。

本調査では，これらの31質問項目で表わされた場面について，これも予備調査で採取された「はずかしい」の連想語のうち代表的な3つ（「顔が赤くなる」，「てれる」，「人の目が気になる」）にいま1つ「自分を恥じる」を付け加えた4つの反応型によって，予期的反応度を測定した。被験者は中学生（男子19名，女子21名，計40名），高校生（男子20名，女子20名，計40名），および大学生（男子31名，女子31名，計62名），総計142名（男子70名，女子72名）であった。

結果は年令，性，反応型の3要因について分折された。性要因については一貫した主効果がみられ，女性の値が男性のそれより常に高かった。年令要因にはそのような明確な傾向性はみられなかった。本稿での分析の主眼は反応型の要因であるので，被験者全員の各反応型での平均値を求め，これを図1に示す（男女ほぼ同数なので，性差は相殺されたものとみなす）。

図1に示された反応パターンによって，各項目を大き

表1　質問項目として採用された羞恥生起場面
（伊藤，1979を再編成したもの）

群	カテゴリー	項目番号	項目内容
I	人格的劣等	18	自分の（人格的）いたらなさを自覚する
	対他的罪責感	8	人にすまないことをした
		3	人にうそをついたり人をだました
		23	規則や約束事を守らなかった
	能力的劣等	7	人と比べて自分が（能力的に）劣っていることがわかる
II	人前での失敗	6	自分の欠点や弱点を人前でズバリと指摘された
		9	失敗して人前で叱られたり注意をうけた
		13	自分がいいはっていたことがまちがいだとわかる
		4	人前で失敗した
		22	場違いないことを言った
		17	ひとりだけ人とずれたこと，ちがうことをしていた
		27	大勢の人の前で苦手なことや気のすすまぬことをさせられる
		28	人前でおならをした
III	みなりの奇異さ	16	破れた服やボタンとのれた服を着ている
		21	他の人に比べて自分の服装がみすばらしく思える
		26	いつもと自分のようすがちがうと感じる
IV	露呈	14	人前で他人にいじめられたり，ひやかされる（恥辱）
		32	裸になっているところを人に見られる（裸出）
		11	自分が秘密にしていることを人に知られる
	注視	2	他人に顔やからだをじろじろ見られる
		5	同じ年頃の異性がたくさんいるところに自分ひとり出る
		19	視線が自分に集中している
	賞賛	1	大勢の人の前で得意なことをする
		24	みんなの前でほめられる
V	公表	12	自分の作文・絵・写真などを人にみせる
	二者的状況	29	初対面の人と2人きりで話をしなければならぬ
		15	すてきな人の前に出る
		10	好きな人と目があう
		20	異性と2人きりでいるところを知りあいに見られる
VI	性的話題関与	30	性に関する話を聞く
		25	テレビのラブシーンを親を一緒に見る

く6つの群に分類することができる。

I群（項目番号18，8，3，23，7）；これらは「自分を恥じる」という反応が特に高かった群で，内容的にも私的な羞恥体験を表わしている。この中には木村（1972）[12]のいう「他者志向的罪責感」（8，3，23）と，作田のいう「私恥」（7）に該当する項目が含まれている「**私的羞恥**」群と呼べるであろう。

II群（6，9，13，4，22，17，27，28）；これらは4つの反応型間に大きな差がないもの（混合型）である。内容は総じて公共的場面における劣等性の現われを示す。後のIV群に比べて「自分を恥じる」意識を含む点で異なる。この群を「**典型羞恥**」群と呼ぼう。

III群（16，21，26）；これらはみなりに関する項目で，「人の目が気になる」反応のみが高かった。この群を「**被視感**」群と呼ぼう。

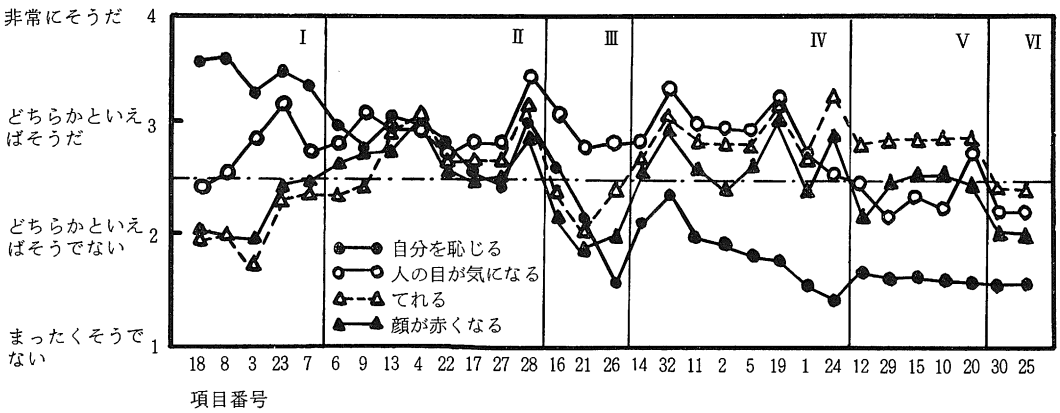

図1　羞恥生起場面での各反応型による平均評定値（伊藤，1979により作成）

IV群（14，32，11，2，5，19，1，24）；この群は総じて他者の注視を浴びる場面を表わしている。しかし必ずしも道徳的逸脱を伴うものではなく，逆に賞讃を表わす項目（1，24）さえ含んでいる。注視を浴びること事体がはずかしいのである。反応型においては「自分を恥じる」反応だけが低い点でI群とは対照的である。この群を「**公的羞恥**」群と呼ぶことにする。

V群（12，29，15，10，20）；これらは二者的状況を主とした群で，「てれる」反応だけがやや高い。これらを「**照れ（軽羞恥）**」群と呼ぼう。「中間状況」（対面集団的状況）である先のIV群に比べ，二者的状況での反応が低いのは，内沼（1978）[12]らの指摘するところと一致する。

VI群（30，25）；これらは性的話題への関与を表わす。本来性的事象は強い羞恥を引き起こすはずであるが，今回はそれが見られない。近年にはこの程度のことでは羞恥感を引き起こすに至らないのか，あるいは防衛機制が働いたためなのか定かではない。ともかく結果を尊重する限り，この群を「**低羞恥群**」と呼ばざるを得ない。

最初に述べたように，この調査で用いられた項目は全て羞恥を生起させる場面として抽出されたものである。

Benedict は，恥を感じるためには実際に他者が居合わせるか，少なくともそう思いこむことが必要だと述べているが，これらの項目の中に，I群のように他者の現前を第一義的には必要としない項目が含まれていることは，賞讃場面の存在と合わせ，彼女の「恥」論の視野に欠落した部分を指摘したことになる。

次に，4つの反応型それぞれの全項目平均の評定値と，相互の相関関係を図2に示す。因子分析に例えていえば反応型は因子に，平均評定値は固有値に，相関係数は因子相互間の距離にみたてることができる。

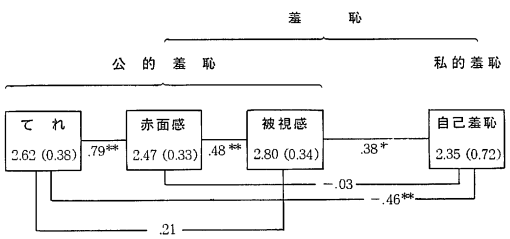

図2　羞恥心性の構造

数値は相関値（*……5％，**……1％水準）箱の中の数値は評定値の平均とSD

これによると，「照れ（てれる）」と「赤面感（顔が赤くなる）」とは近接しており，「自己羞恥（自分を恥じる）」とは対極にある。そして，その中間に「被視感（人の目が気になる）」が位置し，両者を媒介している。反応値も最大である。これらの結果は，被視感即ち他者のまなざしへの囚われが羞恥心の中核であることを示している。

III．羞恥の辺縁―― SD 法的接近

「羞恥」という言葉はいかなるイメージを人々に与えるのか。羞恥の類語である「恥」，「罪」，「照れ」，「赤面」とはどのような関係にあるのか。これらの点を検討するために，Osgood の SD 法を用いて各概念が構成する意味空間を捉えてみたい。

手続き；上記の5つの概念について，評価，活動性，潜勢力の3次元を考慮しながら選定され10コの形容詞対を尺度として，7ポイントで答えてもらう。（図3を参

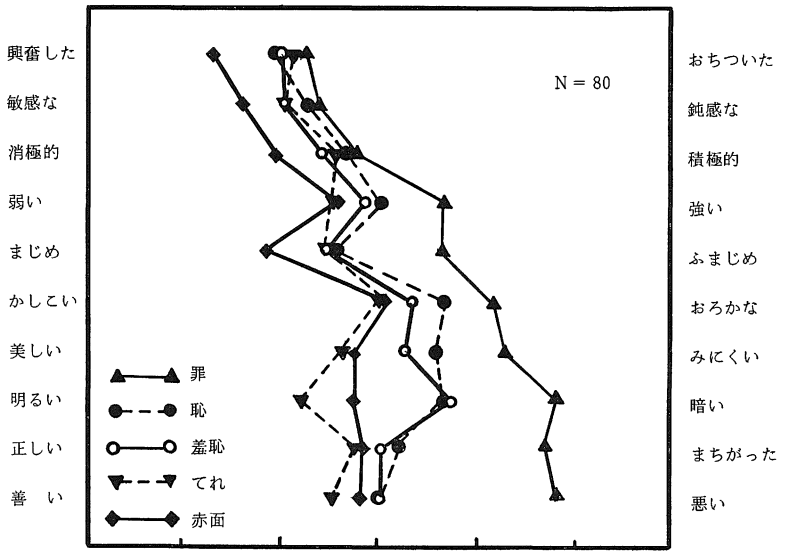

図3　羞恥関連概念のプロフィール

一方，評価的次元ではいずれもほぼ中立的であり，特に道徳的評価においてそうであることは注目に値する。「恥」や「羞恥」は「てれ」や「赤面」と同様，「罪」のように悪いものともまちがったものとも受けとめられていないのである。「てれ」などはむしろわずかながら善いもので，ある程度の明るささえ伴っている。

3) 各概念間の相対的布置はほぼ一貫しており，そこにかなり強い一次元的関係性が予見される。

照されたし。なお各尺度の順序及び極性は，質問紙上ではランダムになっている。)

被験者；大学生男子40名，女子40名，計80名。

結果；まず，性差については「恥」や「赤面」の一部に（無修正）有意水準で5％程度の差がみられたが，「罪」や「てれ」，「羞恥」では殆んど認められなかった。ここでは性差については省略し，男女を合わせた全体平均で考えていくことにし，そのプロフィールを図3に示す。

考察；図3より以下の3点が示唆される。

1)「罪」は何らかの価値評価を伴う次元において，他の概念に比べ否定的に捉えられている。これは道徳的評価において特に著しい。

2)「羞恥」と「恥」は非常に近接しており，「てれ」と「赤面」も比較的似た軌跡を示している。この4つの概念は，全体としてやや興奮し，敏感であると同時に少々消極的なものとして受けとめられている。ここには，内的覚醒と行動的抑制という，前述の日本人的二重性がみてとれる。この傾向は「赤面」に特に顕著である。

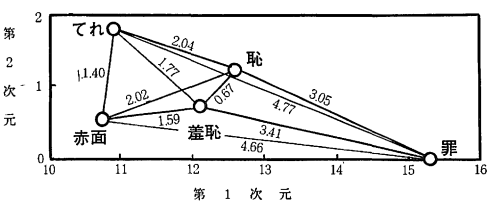

図4　羞恥関連概念の相対的布置

数値は各概念間の距離（図上での距離とは必ずしも一致しない）

以上の点をより詳細に検討するため，次に Osgood 流の因子化を試み，併せて各概念間の距離を算出する。その結果を2次元的に図化し，図4に示す。なお第3次元以下の残余は極めてわずかであり，従って図上での距離と概念間の距離はほぼ近似する。

プロフィール上で示唆された諸点はここでもほぼ確認された。しかもこの意味空間上における位置関係は，図2で示した羞恥心性の構図とかなり類似している。羞恥の内側から迫った図2と，外側から迫った図4とが重なり合ったところが「羞恥」心性の全体像である。これを図式化し，図5として示す。

図式化すると却ってわかりにくところも出てくるが，要するに羞恥とは，罪責感や恥，てれと微妙なニュアンスのずれをもちながら，それらを通底する最大公約数的な感情である，ということがみてとれよう。

参考のため，羞恥の反対語を調べてみた結果を付け加えておく。被験者は大学生17名（男子1名，女子16名）。「はずかしい（はずかしさ）の反対のことばと思われるものを挙げて下さい」との教示のもとに，思いつくままいくつでも答えてもらった。多数の者が答えた反対語は

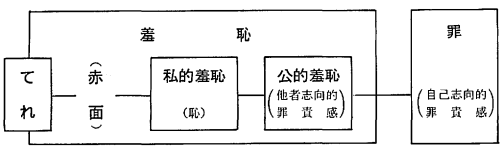

図5　日本人の羞恥的心性の構図

「自信（過剰）」（8名），「堂々（とした）」（7名），「平常，冷静等」（6名），「ほこり（ほこらしさ）」（5名），「自惚れ（自慢等）」（4名），「優越(感)」（3名），「図々しい（図太い）」（3名）などであった。自己評価や心理的安定性に関わる語が多数を占めたが，評価的調子は肯定的，否定的の両面にわたり，ここでも価値中立的な傾向がみられたのはおもしろい。

IV. 結　び

Modigliani, A. (1968) [13] は embarrassment（対人場面での当惑）の個人差に着目し，これを1つの人格特性（embarrassability）として取りあげた。そしてこの embarrassability の高い人々に，高い自己不全感（自分に対する他者の評価を実際より低く認知すること）がみとめられ，しかもこの相関関係が，共感能力（文学作品上の登場人物の感情状態への理解度）が高い場合にはさらに大きくなることを見出している。

彼の記述した embarrassment は，本稿でみてきた羞恥とかなり類似しし内容をもっており，これを彼は他者の評価的視線への感受性や，他者の心理状態への共感性との関連で捉えていこうとしている（彼の使った尺度には当惑している人への共感的同一化を表わす項目まで含まれている）。

先に我々は，羞恥を日本人特有の心性とみなして論じてきたが，この両者にみられる情動経験それ自体は，必ずしも質的に異なるものではないかもしれない。もし違うとすればそれは，このような情動性に対する社会的価値観（業績価値と和合価値）の違いに基く評価的態度の違いや，命名に表われてくる認識の違いにあるのであろう。Modigliani の "embarrassability" の概念は，最近では，スタンフォード大学の Zimardo. P. G, (1977) [9] や Pilkonis, P. A. (1977) [14] の "shyness" の研究に引き継がれている。しかしそこでは shyness を社会的存在としての機能の不全態即ち社会的不適応として捉えた上で，専ら治療的アプローチがなされている。彼らに，Modigliani が当初抱いていた問題意識が希薄化しているのが感じられ，いささか残念である。

とはいえ，このような羞恥親和性の個人差についての研究は当然必要であり，本稿での論考がいわば羞恥の「記号論」に終始したことと併せ，今後の発展が待たれるところである。

注）各調査は1978年から1980年にわたって独立に行なわれたものである。従ってサンプルは各々で異なる。

参考文献

(1) Buss, A. H., *Self-Consciousness and Social Anxiety*. W. H. Freeman & Co. 1980.

(2) 山下格，対人恐怖　金原出版，1977.

(3) Laing, R. D., *The Divided Self*. Tavistock Publication, 1960.（阪本，志貴，笠原訳，ひきさかれた自己，みすず書房，1971.）

(4) 和辻哲郎，風土，岩波書店，1935.

(5) Benedict, R., *The Chrysanthemun and the Sword*, Houghton Mifflin Co. 1946.（長谷川訳，菊と刀—日本文化の型，社会思想社，1967.）

(6) 作田啓一，価値の社会学，岩波書店，1972.

(7) 内沼幸雄，羞恥の構造——対人恐怖の精神病理，紀伊国屋書店，1983.

(8) A. P. A., *Psychological Abstracts*, 68 (6−2), INDEX, 1982.

(9) Zimbardo, P. G., *Shyness ; What it is, What to do about it*. Addison-Wesley, 1977.

(10) 大野晋，日本語の年輪，新潮社，1966.

(11) 伊藤恵子，青年期の自我意識に関する一研究——「はじ」の意識を通して，島根大学教育学部卒業論文，1979.

(12) 内沼幸雄，対人恐怖の人間学——恥・罪・善悪の彼岸，弘文堂，1978.

(13) Modigliani, A., Embarrassment and Embarrassability. *Sociometry*, 1968, 31, 313−326.

(14) Pilkonis, P. A., The Behavioral Consequences of Shyness. *Journal of Personality*, 1977. 45, 596−611.